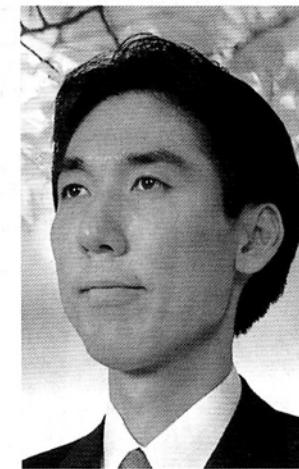


城内 実の視点！ 時代を考察する(7)

—自民党はなぜ
参院選で惨敗したか—



前衆議院議員・拓殖大学客員教授 **城内 実**

七月二十九日の参議院選挙の結果は自民党的惨敗であつた。全国に二十九ある一人区で六勝二十三敗。私が存じ上げている自民党的参議院議員の方々も「自民党」という看板をたまたま背負つていたために、次々と民主党の候補に敗れた。

中でも、岡山选举区の自民党参議院幹事長の片山虎之助氏と島根选举区の影山俊太郎氏の落選は衝撃的であつた。自民党王國の岡山県や島根県だけでなく、もともと自民党的金城湯地である、東北、北陸、四国、九州などでのきなみ自民党候補が惨敗した。それに対して民主党は六十議席、参議院で初めて第一党の座を獲得した。

今回の自民党的惨敗の原因はどこにあるのだろうか。果たしてマスコミが報じるよう、「年金問題」や

「政治とカネ」の問題が选举結果に影響を及ぼしたのか。私はもっと根が深いと思っている。これまで地方の自民党組織を支えてきた、個人商店主、中小企業経営者、農業者、特定郵便局長会や医師会などの各種団体なども含めた、国民全体が、安倍政権が引き継いだ前政権の構造改革路線に対して、はつきりと「ノー」をつきつけたからだと理解している。

私は最近、この構造改革路線のことを、オウム真理教やイスラム原理主義をもじって、「カイカク真

理教」とか「カイカク原理主義」と呼ぶことにしている。あたかも「カイカク、カイカク」とお題目を唱えさえすれば、幸せになれます、健康になれます、豊かな生活がおくれます、と善良な市民をだましている姿が目に浮かぶ。実際は、庶民や生活弱者の生命線である簡保、郵貯が廃止され、医療負担が増し、消費税をはじめとする税負担も増大するような政策が着々と進行中である。

『奪われる日本』の著者の関岡英之氏などは、改革を英訳するとリフォームなので、「リフォーム詐欺」と名付けておられた。必要もないリフォーム(=改革)のために多大の時間と金銭と労力をかけているわけである。「リフォーム詐欺」とはまさにぴったりの表現だ。

必要な改革をほとんど行わず、必要なないカイカク(=改悪)、パフォーマンス型のカイカクを行っているのが今の構造カイカク路線である。その結果、地方では過疎化が進み、商店街はどこもシャッター通りと化している。大企業は潤つても中小零細企業はコストダウンで苦しんでいる。夫婦で年収二百万円程度で子育てしなければならない世帯がどんどん増えている。子供の給食費が払えるのに踏み倒すような親は論外だが、本当に払いたくても払えない人

たちが大勢出でてきている。ワーキングプアの問題もしかり。みかけだけの経済成長、「上げ潮路線」なるものに惑わされて、底辺のこういう悲惨な現実に政治は目をそむけてはならない。

それでは、本来まず真っ先に行うべき必要な改革とは何か。私はこれだけ国民の間に政治不信が蔓延しているからには、まず国會議員の改革、立法府改革を行わない限り国民は納得しないと思っている。政治家たちは口では、やれ行政改革、公務員削減、天下り禁止と叫んでいるが、こと政治家自身の既得権益に関わることがらに関してはほかむりをきめこんでいる。

衆議院の比例代表制度の見直し、議席の大幅削減、議員宿舎の廃止、議員年金制度の即時全廃、政治資金規正法改正を通じた領収証添付などの規制の強化、JR私鉄バス乗り放題バスの廃止、衆参事務局や国会図書館の予算の大幅削減などなど、検討すべき課題は多い。まず国會議員自らが「痛みを伴う」改革を断行しなければ、国民が「痛みを伴う」構造カイカク路線などについていくはずがない。

なお、私は從来二院制論者であつたが、衆議院で僅差で可決された郵政民営化法案が「再考の府」、「良識の府」といわれてゐる参議院で大差で否決さ

れたにもかかわらず、憲法上疑義があるような解散が行われた。これにより、参議院不要論に傾くようになつた。参議院の廃止が実現すれば、これこそ真の立法府改革である。

パフォーマンス型のカイカクの最たるもののは、私はクールビズではないかと思つてゐる。民間会社やお役所で推進することは結構だと思うが、なぜ首相、閣僚含めて国會議員までクールビズなのか。私は、抵抗勢力と言われようとも、国会内のクールビズには反対である。庶民が額に汗してまじめに働いているのに、クーラーがきいた涼しい

国会内で国會議員がネクタイもしめずにだらしないかつこうで質問や答弁をしている。国会における質問のやりとりにしても、これまでいろいろ聞いてきたが、ほとんどが出来レースか、足の引っ張り合いといったたぐいのもので、与野党の議員が全員「おおっ」とうなるような名質問、名答弁などはほとんどない。せめて外見だけはきちんとして欲しいと思つてゐる。

地方では、自民党の選挙スローガン「成長を実感に」は全く空虚に響いた。多くの庶民はしらけてしまつてゐた。「成長を実感に」どころかどんどん「不安感が実感に」、「格差社会が実感に」、「地方切

り捨てが実感に」なつてしまつたからである。

安倍晋三首相は、これまで「戦後レジームからの脱却」を主張してこられたが、まず行うべきことは、弱肉強食型の構造カイカク路線からの脱却である。地方にやさしく、本当の血の通つた改革を行わない限り、国民は今の自公政権を遅かれ早かれ見放すであろう。

プロフィール

城内 実（きうち みのる）

昭和四〇年 四月一九日生まれ

平成元年 東京大学教養学部国際関係論分科卒業し、外務省に入省

平成二年 在ドイツ日本国大使館勤務

平成九年 天皇陛下、総理等のドイツ語通訳官

平成一四年 外務省を退官し、公募に応募

平成一五年 衆議院議員初当選（無所属）

平成一六年 党改革実行本部幹事

平成一七年 農林水産委員会委員、環境委員会委員、郵政民営化特別委員会委員

平成一七年 第四十四回衆議院選挙にて七四八票差で惜敗

平成一八年 拓殖大学客員教授